

吉澤夏子先生の定年退職にあたって

吉澤夏子先生は2021年3月に定年を迎え、立教大学社会学部を退職されました。2007年4月に社会学部社会学科に教授として着任されて、社会学部の基幹科目である「社会学原論」や社会学の主要な領域の一つ、「ジェンダーの社会学」などをご担当されました。

吉澤先生は、社会学の基礎理論から現象学的社会学やルーマンの社会システム論などをご専門として、他方では現代の社会現象の分析などを、フェミニズム論やジェンダー論の視点から捉えてきました。ご著書の『フェミニズムの困難——どういふ社会が平等な社会か』(1993年)や『女であることの希望——ラディカル・フェミニズムの向こう側』(1997年)では、「男性と女性が平等である社会」、「個人的なものの領域」などの明確な問題提起に基づいて、どのような社会のことか、あるいはどのような領域であるかについて丁寧に描いています。いずれも今日に続くテーマであり、フェミニズムやジェンダーにかんする単純な「二元論的」フレームを超えた論旨は、その後の作品にも反映されていきます。ご著書『世界の儂さの社会学——シュッツからルーマンへ』(2002年)では、シュッツの現象学的社会学やルーマンの社会システム論という異なるアプローチからの社会現象の理解を、「世界が儂いものかも知れない」という感性や含意などに着目して「両者の通底性」に迫ります。その後も『「個人的なもの」と想像力』(2012年)、翻訳書『ラディカル・ルーマン——必然性の哲学から偶有性の理論へ』(2018年)を上梓されて、社会学の理論や論議を敷衍し続け、また吉澤先生ならではの鋭敏かつ繊細な議論を展開されてきました。

吉澤先生の問題の想起と社会学的な思想や議論に基づくアプローチ、および社会学の理論と「現代性」を探求する姿勢は、教育場面でも遺憾なく発揮されてきました。演習の授業では文献購読を中心にして、個々の学生が「最も関心のある事象を取り上げて、それについてさまざまなデータや二次的な資料を含めた文献を使って論文を書くというスタイル」を採っています。質問票やインタビュー調査を行うゼミナールが多いなかにおいて、社会学部にとって貴重な理論系のゼミでした。

講義科目でご担当されたジェンダーの領域は現代社会の主要課題でもあり、多様なテーマにジェンダーが関係することについて、吉澤先生は「グローバリゼーションとジェンダー」や「権力とジェンダー」などいくつかのテーマを取り上げて論じてきました。大学運営では社会学部教務委員長(2010年4月～2011年3月)、社会学科長(2011年4月～2013年3月、2018年4月～2019年3月)としてご尽力されて、教育、研究、大学運営に大きく貢献されました。

先生の真摯な学問的アプローチ、現代社会の問題を常に問い続ける姿勢は、学部や大学院の学生だけでなく後進に大きな影響を与えてきました。今後もご健康に留意されて、ますますご活躍されることを願ってやみません。

2022年3月

社会学部長
水上 徹 男